林業研究グループの活性化と森林環境教育・林業技術の普及

北秋田地域振興局　金澤正和

１．はじめに

北秋田地域は秋田県の中央北部に位置し、大館市、北秋田市、上小阿仁村の２市１村からなり、中央部を米代川が流れ、天然秋田スギの産地として古くから林業・木材産業の栄えてきた地域である。地域の民有林面積は７６千ha、人工林率は約６０％で、人工林のうちスギの占める割合は９８％となっている。

当地区は民有林人工林率、蓄積ともに県内屈指の林業地域であるが、そうした民有林を支えてきた団体として林業研究グループがある。林研グループは平成７年には１５グループあり、会員数も２１７名であったが現在は５グループ、７６名と減少しており、その活動も衰退の傾向にある。

一方、地域住民の自然環境に対する関心や森林の持つ公益的機能への期待や関心は年々高まっており、小・中学校の総合教育や地域住民の自主的な活動支援のための森林の正しい知識や林業技術の提供が求められている。

そうした現状を踏まえ、林研グループの持つ「知識」や「技術」を活用した地域への普及活動の展開により、地域住民から求められている森林と林業に関する正しい知識の普及とグループの存在のＰＲを図り、また、そうした活動をグループ会員自らが展開することによって会員の意識や活動の活性化につなげる事を目的として取り組みを展開した。

２．取組内容

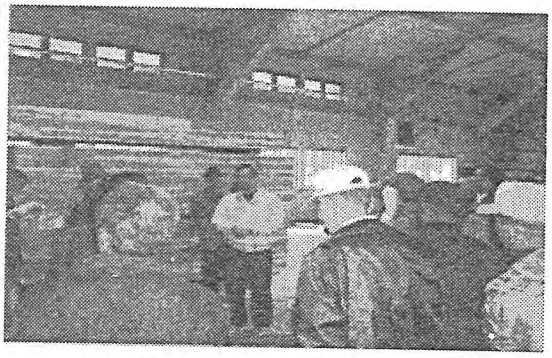
（１）情報交換・技術研修の実施

グループの中でも活発な活動を行っている２つのグループがあり、そうしたグループの活動の情報交換をかねたグループ全体の技術研修を実施した。

グループ活動の紹介では、大径無節材生産による地域産材のブランド化を目的としているグループの取り組みと、材の付加価値を高めることを目的として、毎年県外の林業地への視察研修を行っているグループの取り組みを紹介した。

技術研修では、３３年生スギ林の搬出間伐により、３haで１００万円ほどの収益をあげている優良事例地における生産コストの研修と製材品市場及びスギ集成材工場の視察を行った。

間伐団地の視察



集成材工場の視察

（２）林業教室の開催

地域の小学校５年生３０人を対象に、森林学習と林業体験を行う林業教室を開催した。

はじめに普及指導員が木の働きや木を育てていくことの意味、重要性についての学習会を行い、次にグループ会員による育林体験と木工教室を実施した。

育林体験では、１７年生スギ人工林において除間伐施業を行った。はじめに林研グループの会員が伐倒の見本を見せ、その後会員の指導の基に児童一人一人が鋸を使って木を倒し、枝落としと玉切り、林内からの搬出を行った。

木工教室では、地元の森林組合が販売しているスギ製の折りたたみイスの製作を行った。

小学生による間伐作業

折りたたみイス製作

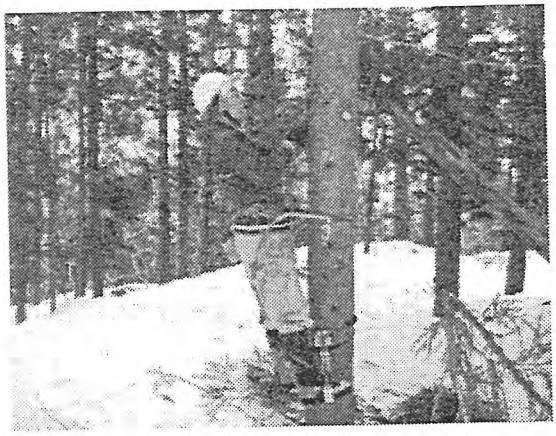
（３）技術向上研修会の開催

地域の森林組合の若手職員を対象に、グループの持つ技術の継承を目的として研修会を開催した。

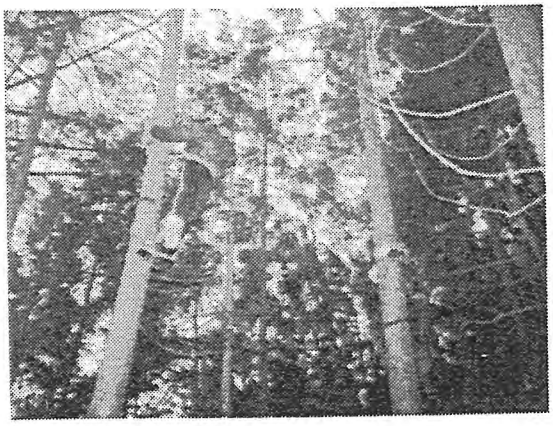
はじめに、地域における森林組合の役割を理解してもらうために、林業行政と森林組合の関わりや保安林制度、森林整備事業についての講義を普及指導員が行い、その後、グループ会員による施業技術の講習会を行った。

講習会では、登降機を使用しての枝打ちを「森の名手・名人１００人」の枝打名人に選定されているグループ会員の実演により行った。

森林組合職員は入社後の研修で、チェーンソーや高性能林業機械の操作等は習得しているものの、木に登っての枝打ち作業は初めての体験であった。はじめは慣れない作業でぎこちなさがあったものの、会員の指導により後半には丁寧な作業ができるようになった。



会員による講習



組合職員の実演

３．取組の成果

以上３つの取り組みを行ったが、

（１）情報交換・技術研修では、他のグループの活動を紹介したことで、活動停滞気味のグループには刺激を与えることができた。また、普段見ることのない木材加工施設や優良な間伐事例を視察したことで、これまで育ててきた山から今後、どう収穫を上げていくかを考えるきっかけになった。

他のグループの取り組みや視察研修を行うことで、会員個々の目的意識の向上が図られたと考えている。

（２）林業教室の開催では、児童は木を育てることを自分たちの手でおこない、更にそこから生産された木材が自分たちの生活に役立つということを体験しながら学ぶことができた。また、学校の先生からは、通常の授業では学べない知識を体験しながら学ぶ事ができたと好評を得た。

林研グループの会員にとっても、自分たちの知識や技術を地域活動への支援という形で活用できることを実感でき、新たな取り組みへの展開を見いだすことができた。

（３）技術向上研修会では、これまで培ってきた施業技術の１つをこれからの林業の担い手である森林組合の若手職員へ継承でき、そうした活動を自らが展開したことによって、グループの技術・知識の地域への定着化が図られたと実感しており、地域林業のレベルアップにつながる取り組みができた。

これらの取り組みにより、林業に対する地域の理解を深められたとともに、地域の活性化につながる活動ができたと考えている。

以上の成果から、今後の普及指導の展開について考えてみた。

４．今後の普及指導の考え方

これまでの普及指導は、指導員から森林所有者や林研グループ、森林組合等に対する技術指導という一方的な流れが主な内容であった。

しかし、戦後に植林された森林は、その成熟度を年々増しており、収穫期を迎えつつあることから、これまでの指導により一般的な育林技術はほぼ定着された考えている。

今後の展開として、１つ目としては、森林所有者等の「生産者」が抱える問題と地域住民やボランティア団体が抱える問題があり、そうした相互の問題解決に向けた取り組みを普及指導員が今回のような形で企画し、その取り組みをサポートしていく必要があると考える。こうした活動を展開していくことで、サラリーマン森林所有者等に対しての林研グループの存在がＰＲでき、会員勧誘にもつながるであろうし、グループの新たな存在価値を会員が見いだすことでグループ活動の活性化も期待できる。

２つ目としては、今後、収穫期を迎えるにあたり、林業の活性化を図るには森林所有者だけでなく森林組合等の素材生産業者や製材業者・工務店といった木材ユーザーを含めた林業・木材産業とした、地域の取り組みが重要と考える。

例えば、これまで良質材生産に取り組み、腐れや節の無い木に生長したとしても、その

木を伐採し、素材を生産する業者がその価値に気付かず他の不良材と同様に扱われることになれば、これまで育てた苦労が報われないことになる。また、良材を扱いたいと考えている製材業者や工務店があったとしても、そうした材が流通しなければ地域の産業が衰退することになる。

したがって、生産者から消費者までの地域の連携としての取り組みが必要であり、そうした取り組みを展開していくうえでの対外的な折衝や仕組みづくりが今後の普及指導にも求められてくると考える。

こうした要望に応え、「活動のサポート」や「地域の連携」といった取り組みを展開する為には地域の情報収集はもちろん普及指導員自身の新たな取り組みや考えが必要ではないだろうか。